

鳥根の記憶

15

「**琴**だらす」。こんな

名の愛好会が松江市にある。だらすとは出雲弁で「のぼせ者」というような意味。つま

り、琴が好きでたまらない人たちの集まりだ。

同市末次町でギフト店を営む長谷川恵一さん(56)もメンバーの一人。好きが高じて、

太鼓、チャンガラと呼ぶ「銅びょうし」とともに琴行列に欠かせない横笛を作ってしまった。

同町の琴をたたいてきたが、四十歳の時、吹き手が数人に減った横笛を覚えようと市内の春日神社の宮司に習い始めた。一か月はまともに音が出なかった。「人が吹けるのだから出来る」。息を出す量や角度を試行錯誤しながら吹けるようになる。初心者用の細い笛が物足りなくな

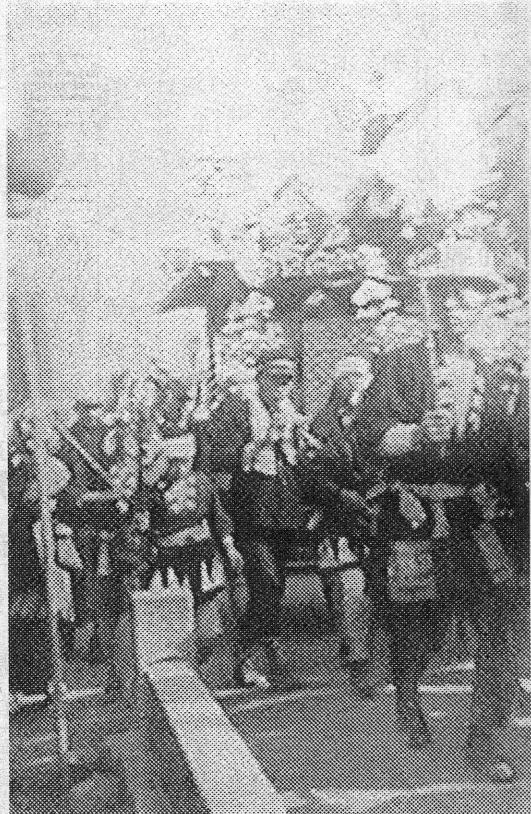
った。祭りでは、雅楽で使い、指でふさぐ穴が七つある「龍笛」が吹かれることもあった。京都の職人が作るものなどが伝わるが、地元では、かつて

吹き手だった祖父大次郎さんが手作りしていた。長谷川さんは幼いころからそれを見て育ち、手先の器用さを受け継いでいた。数年後、市内の竹林から竹を採ってきて、見よう見まねで作り始めた。

琴だらすはメンバー約三十人が町内の枠にとられず集まり、基本を守った上で技のレベルを上げ、全国に「松江の琴」をPRするのが狙いだ。二〇〇一年に愛好会を立

その2

松江の琴

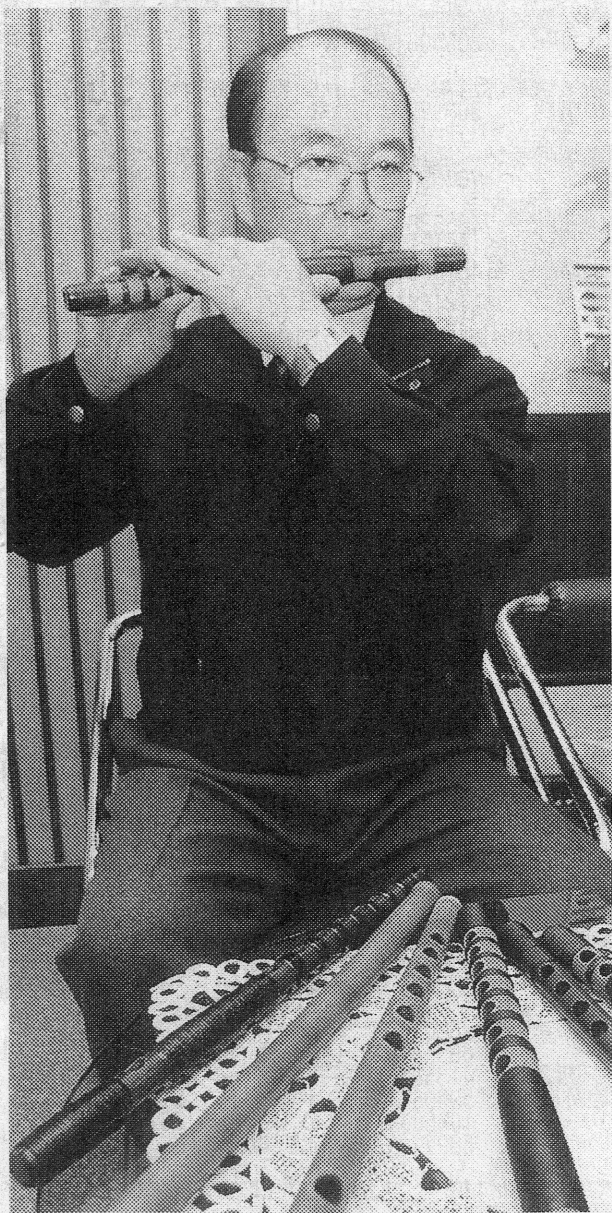


1928年(昭和3年)、昭和天皇御大典を祝って出た行列―若松秀俊・東京医科歯科大学大学院教授の提供

ち上げ、チャンガラも得意な平野一朗さん(53)が力を込める。
「琴を思い切り殴り、大きな音を腹に響かせると、超気持ちいい。それをみんなに知ってほしいし、次代に引き継いでいきたい」

(終わり)

自分で手作りした横笛を吹く長谷川さん



「超気持ちいい」伝承